



宮城県林業技術総合センター
森林科学情報誌

2022年9月発行

第60号

- 挨拶 持続可能な森林経営の実現に向けて
- 究める／広める／育てる(業務最前線)
- 知識の泉(森の話/木の話) 山村文化の基層を為すもの
- 普及指導の現場から
活力ある林業県宮城と美しい森林づくりを目指して
- 楽／学広場(イベント)
- 庶務のまなざし



持続可能な森林経営の実現に向けて

宮城県水産林政部

副部長 中村 彰 宏



林業技術総合センターの勤務は、平成30年度に企画管理部長として1年間、短い期間ではありましたが、貴重な経験をさせていただきました。行政と試験研究機関では、立場や業務の性質などが異なるため、物事の捉え方や感じ方、判断にも違いが生じて当然です。従って、当時の経験は、双方の視点を持つ上では、大変役に立っています。

企画管理部では、建設されるセンター(事務・研究棟、研修棟)の設計図を見ながら、実際に使用する研究員らとともに、レイアウトなどに最終的な意見を出し合いながら、間取りや備品配置などの調整を行うとともに、建設予定地に立つ未使用施設(展示館)の解体に際して、残置物の分別や保管場所の移動などを職員総出で行い、新センター建設の準備に当たった記憶があります。

また、センターの長期プランである「宮城県林業試験研究推進構想」について、成長産業化に向けた新しい林業技術導入の視点を盛り込み見直した「宮城県林業試験研究・技術開発戦略」の策定を進めました。エリートツリーなどの次世代優良種苗の開発、ICT等を活用した森林情報の収集・解析技術の高度化といった「林業のイノベーション推進」、新センターの機能や敷地内の有用資源を活用して、本県の林業技術・情報の集積・発信拠点とする「林業のシンクタンク機能の充実」、これらを同戦略の柱に据え、特に、後者の実現には強く期待を込めました。改めて読み返すと、策定後3年間で具体化・進展した研究領域が非常に多く、この間の関係者各位のご尽力に敬意を表します。

さて、水産林政部のスローガンは、「環境と調和した持続可能な水産業・林業の実現」です。気候変動、激動する社会・経済情勢の変化に対応し、森林・林業の持続性をいかに確保し、高めていくかが求められます。昨今、SDGsの実現と相まって、「持続可能な森林経営」がキーワードに使われることが多くなっています。また、「森林の多面的機能の発揮」には、持続性の確保が欠かせません。この2つのテーマは、政策の最優先課題と考えています。

人工林林業において持続可能な森林経営は、森林を適切に整備し、伐期に達した資源を活用して、新たな木材需要にも対応しながら、“木を使い・植え・育てる”という循環の仕組みを、資源・経済面から定着させていくことにあります。循環の成立によって、森林の多面的機能が持続的に発揮されることに繋がります。一方、自然条件等によって、森林を健全な状態に保つことができない人工林では、多面的機能を引き出すため、針広混交林や広葉樹林に転換するなど、多様な森づくりへの誘導も必要となります。

持続可能な森林経営の実現と森林の多面的機能の持続的な発揮という行政課題の観点から、同戦略に掲げられている、次の2つの研究領域のさらなる取組推進を期待します。

■森林情報の高度化・共有化

進展する林業スマート化技術は、林地の所有構造の小規模・分散性、零細経営の対応にも効果的で、深刻化する人手不足の中では、実装が急がれます。このため、地上型三次元レーザスキャナ、無人航空機(ドローン)、衛星画像等のセンシング技術を活用し、本県の地形や樹種等の状況に応じ、森林情報を効率的・高精度に収集・解析するシステムの確立及び普及

■森林の適切な保全と多様で健全な森林への誘導

人工林が基盤である森林の多面的機能をさらに引き出していくため、針広混交林や広葉樹林へと転換していく、効率的・効果的な誘導・管理技術の確立及び実証

これら取組に加えて、森林・林業を支える人材の育成については、林業の就業環境の向上を一体的に展開する「みやぎ森林・林業未来創造機構」の設立により、本県独自の推進基盤が整備されたところです。

また、同機構に創設された「みやぎ森林・林業未来創造カレッジ」は、新センターを拠点として、今年4月に本格開校し、森林組合や事業体等から沢山の研修生が参加して、充実した研修が実施されています。普及指導及び試験研究とともに、カレッジ運営などの林業人材育成分野での役割が強化され、貴所が目指す「林業のシンクタンク機能の充実」へと、また一歩前進したものと考えています。

結びに、本県の森林・林業行政は、豊富な森林資源を有効に活用しながら、森林を適切に管理・整備し、多面的機能に優れる森林へと大きく発展させ、次の世代に着実に引き継いでいく、という政策目標を有しています。先人の植林の努力に報いていくためにも、今が重要な時代であると認識しています。持続可能な森林経営の実現に向け、今後とも技術的な面からのバックアップを期待します。



究める/広める/育てる

センター業務の柱である試験研究や普及指導、人材育成(研修)業務の最前線をご紹介します。

◎令和4年度主な試験研究課題の概要

■ ニホンジカの効率的な捕獲を目指して

近年、ニホンジカの分布の拡大が問題となっています。本県でもかつては牡鹿半島で見られる程度だったニホンジカが、現在では石巻市や気仙沼市などの沿岸部に留まらず、登米市や大崎市といった内陸部でも増加しており、食害による農林業被害が深刻になっています。分布の拡大を防ぐためには捕獲圧を高める必要がありますが、高齢化等により狩猟者が減少しているため、少人数でも効率的に捕獲できる方法を確立する必要があります。



当センターでは、効率的な捕獲方法として、ニホンジカを餌でおびき寄せてくくり罠で捕獲する餌誘引くくり罠猟に着目し、和歌山森林管理署が開発した「小林式誘引捕獲」の実証試験を実施しています。また、本方法により餌の嗜好が異なるツキノワグマの錯誤捕獲が減少することも期待されます。

これからも当センターでは、ニホンジカの分布拡大に伴う農林業被害を軽減させるため、効率的な捕獲方法に関する研究に取り組み、狩猟者の方々に役立つ情報を提供していきたいと考えています。

【環境資源部 田中 一登】

■ ハタケシメジ「みやぎLD3号」の開発に向けて

県では、県産きのこ生産の更なる振興を図るため、空調施設内栽培用のハタケシメジ品種「みやぎLD2号」を開発し、栽培普及と技術指導に努めてきましたが、近年、野外（露地）や簡易な施設内での栽培において本品種の菌床の需要が増大していることや、品種の開発から約20年が経過し菌株が「老齢化」していると考えられることから、生産現場のニーズに合致した新たな品種「みやぎLD3号」を開発することとしました。

当センターで遺伝資源として収集し保管している野生のハタケシメジ菌株など6菌株を交配育種に用いる親株として選定し、これらを「みやぎLD2号」に交配させることで約500の新たな交配株を育種しました。これらの内、菌糸の生長が良好な160株余りについて、栽培試験による選抜を繰り返すことで、優良な形質と栽培特性を示す交配株の選定を進めています。

今回の育種では、野外栽培に適するような大ぶりで野性味が強く、かつ栽培しやすい品種を開発することとしており、早期に現地において栽培が実用化できるように努めていきたいと思っております。

【地域支援部 玉田 克志】



■ カラマツ種苗の生産体制整備について

カラマツは活着が良く、初期成長が早いと言われ、かつては主要な造林樹種の1つでしたが、乾燥・加工時に割れやくるいが発生しやすく、扱いにくい材とされてきました。しかし近年、乾燥技術の発達により、そのような欠点がほぼ克服され、需要が拡大し、ニーズが高まっている状況にあります。センターではカラマツの需要増加を受け、カラマツ採種園の整備に取り組んでいます。今回はその取り組みについて紹介します。

① 精英樹採種園の改良

センターには昭和38年に設定されたカラマツ精英樹採種園がありますが、現在、母樹の樹齢がおよそ55年生、樹高も20mほどとなり、球果採取には不適な状態となっています（写真1）。このため、安定的な種子の供給を目指し、平成28年から以下のような採種園の改良整備に取り組み、種子の生産に適した環境を目指しています。

- (1) 断幹・・・樹幹を一定の高さで切断し、樹高を低く仕立てる作業です。採種作業に適した樹形に誘導します。（写真2）
- (2) 受光伐・・・光環境を改善するための整理伐です。残った母樹に太陽光が当たる面積を増やすことで光合成を促し、着花促進を図ります。
- (3) 環状剥皮・・・樹幹の樹皮を木質部が見えるくらいの深さまで剥ぎ取る作業です。母樹がストレスを感じることで雌花をつけやすくなります。（写真3）



写真1 カラマツ採種園現況



写真2 断幹作業



写真3 環状剥皮

② 特定母樹の増殖

カラマツ特定母樹採種園の造成に向けて、母樹となるカラマツ特定母樹品種を用意するために、接ぎ木増殖に取り組んでいます(写真4)。カラマツはスギと違って挿し木増殖が難しい樹種であるため、接ぎ木で増殖します。(国研)森林総合研究所林木育種センター東北育種場が配布する特定母樹の穂木を使用し、2年生程度のカラマツ苗木の切断した幹の形成層部分に穂を差し込む袋接ぎという方法で行います。これまでに14系統200個体ほどの増殖を行っており、今後も継続して取り組んでいきます。



写真4 接ぎ木増殖したカラマツ

【企画管理部 山崎 修宜】



知識の泉(森の話/木の話)

森林や木材に関するとおきの知識をわかりやすくご紹介します。

◎ “十二”の意味するところ～山村文化の基層を為すもの（第2回）～

本稿では、本県の林業における山の神信仰の現状について、数回に渡ってレポートします。

前号(第59号)で、新潟県長岡市山古志地区では、山の神を「十二様」と呼ぶことを紹介しました(菊地章太, 2008)。新潟県から山形県置賜地方西部にかけては、「十二神社」、「十二山神社」など「十二」を冠した神社が数多く点在しています。

山古志地区の南隣に小千谷市塩谷十二平(しおだにじゅうにだいら)集落が「ありました」。十二平という地名の由来が気になるところですが、旧山古志村と十二平がある小千谷市東山地区は、かつては「二十村郷(にじゅうむらごう)」と呼ばれた同じ地域になります。十二平は、直線距離で東南約25kmに霊峰八海山などの越後三山が聳える山懐に抱かれた集落です。

十二平に、今、住民はいません。2004(平成16)年10月23日に発生した最大震度7の新潟県中越地震で、集落の全11戸が損壊し、道路も寸断され住民が孤立するなど甚大な被害を被ったことから、全戸が集団移転したためです(震災による集落の死者は0)。それでも、住民の方々は、集落を末永く美しく守っていきたいとの思いから、「十二平を守る会」を結成し、移転後も営農活動、集落内の植樹活動、「じょんでえら(方言で“じゅうにだいら”の意)」石碑の建立などの活動を続けています。2022年8月に訪れた小雨の集落は、草木の緑と調和して静寂のうちに佇んでいました(写真1)。



写真1 十二平集落の入口を示す道路標識（奥のT字路には、震災時に救助を求めるSOSが描かれた）



写真2 十二山神社へ続く葛折りの坂道と神社の鳥居

十二平集落の裏手の山には、「十二山神社」があります。前記守る会会長の鈴木俊郎さんは、元住民を十二平に繋ぎとめているものの一つに神社の存在を挙げています（小千谷市企画政策課，2014）。集団移転後の元住民の活動拠点になっている「よりどころ」と呼ばれる集会所脇の小道を登っていくと、朱色の鳥居が見えてきます（写真2）。神社はきれいに整備され、今でも厚く信仰されていることをうかがわせます。鳥居の脇には、合掌姿の夫婦神像が安置されています。石造りで、もんぺのような衣装を纏ったふくよかな女性神が印象的ですが、男性神は威厳を感じさせる佇まいです（写真3，4）。山の霊威の根源たる恩恵と畏敬を両神が表象しているように思われました。この場所で神事が続いているのであれば、是非とも記憶に留めたいものです。



写真3 十二山神社の鳥居と脇に安置された夫婦神



写真4 合掌姿の夫婦神

さて、ここまでは、十二平の十二山神社について述べてきましたが、このほかにも新潟県には中越から下越にかけて、山への入口付近に十二を冠した神社が所謂“里宮^{*1}”として多く現存しています。

山古志地区には、種苧原（たなすはら）の集落のはずれで山への入口付近に十二山神社があります。下越地方の村上市下中島の十二所神社がある場所もやはり山の口です（写真5）。同じ村上市には、十二所神社から10km圏内に大山祇神社^{*2}（同市下相川）、山津見神社（同市塩野町）が山から少し離れた集落内にあります（写真6，9）。その両社の拝殿にはそれぞれ「大里山神」、「大里神社」の扁額が掲げられており、「大里」に共通点が見出せます。山の神を里の集落内に招いた形でしょうか（写真7，8，10）。神社がある地理的な位置と名称の関係性や距離が近い場所に山の神を祀る神社が併存している点も興味深い問題ですが、いずれにしても、新潟県内には十二を冠した山の神を祀る神社が数多くあることが分かります。



写真5 杉林に囲まれた十二所神社（村上市下中島）



写真6 大山祇神社石鳥居と本殿（村上市下相川）



写真7 大山祇神社の扁額（村上市下相川）



写真8 住宅街にある大山祇神社の周辺。奥の杉木立内に神社がある（村上市下相川）



写真9 山津見神社石鳥居と本殿（村上市塩野町）



写真10 山津見神社の扁額（村上市塩野町）

ここで疑問として生ずるのは、何故「十二」なのかという点です。山の神信仰において、東北日本では「十二」が聖なる数字とされます。他方、西日本では「七」が多い状況です（赤坂憲雄編集，2004）。十二という数字の意味については諸説あり、明確な答えは見出せません。曰く、「十二は一年の月数で、季節を司る神の観念と一致する」。曰く、「薬師如来の眷属十二神将と結びつく」。曰く、「十二は極まった数字の観念として神威の大きさを表す」など、様々な説が唱えられています。一日は「十二時」で分けられ、一年は「十二ヶ月」、干支は「十二支」、十分すぎるほど余りあることは「十二分」です。十二は日常的に区切りの数字として用いられる特別な数字であり、それ故に神に擬せられたのでしょうか。

一方で、聖なる数字「十二」は、山の神信仰においては禁忌としても理解されます。12月12日は、山の神

が木の数を数える日として入山を禁じたり、青森県津軽地方では12人で山へ入ることを畏れ、「サンスケ」という木の人形を持参して13人に擬したりしていました。秋田県との県境にあったマダギの集落である岩手県和賀郡の旧湯田町長松（廃村）では、「雪垢離（ゆきごり）」、「水垢離（みずごり）」という奇習があり、マダギが山の神として信仰する好色の女神という属性に因んだ神事が、旧暦の12月12日（太陽暦では1月中旬）に行われていました（高橋喜平，1991）。

それでは、現在の宮城県内の林業事業体において、聖なる数字であり禁忌でもある「十二」はどのような意味を持つのでしょうか。前号では、県内42の林業事業体に対して、森林施業における神・祭事の実施状況に関するアンケート調査を試みた結果、26事業体から回答があり（回答率62%）、年中行事として山神祭などの神・祭事を実施しているのは、ちょうど半分の13事業体だったことを紹介しました。本調査では、神・祭事の実施状況のほかに、以下の5項目を質問しています。「Q2：神・祭事の呼称」、「Q3：神・祭事の実施内容」、「Q4：開催時期」、「Q5：実施理由」、「Q6：神事の場合の信仰対象」の5つです。質問項目は、柳田らの調査を参考にしました（柳田邦玲雄ら，2016）。今回は、十二の持つ意味との関連で、Q4の回答結果を考察します。

まず、神・祭事の開催月日が決まっているのは、13事業体のうち9事業体でした。内訳は、1月12日が4事業体、12月12日が3事業体、9月9日と10月12日の2日としているのが1事業体、1月5日が1事業体でした。月日が定まっていない4事業体については、1月上旬が2事業体、1月最初週が1事業体、12月～2月が1事業体でした。13事業体に共通しているのは、開催時期が秋季から冬季という点ですが、やはり注目されるのは、開催月日を規定している9事業体のうち8事業体が12日に神・祭事を実施している点です。また、12日に実施している事業体は県北に多い傾向も認められました。

以上から、県内においても、形式や実施内容の差異はあるものの、「十二」が特別な数字として認識されていることが分かりました。「十二」とは一体何なのでしょう。県内林業事業体が「十二」に込めている意味は、本稿の紙幅がもはや尽きていますので、別号で掘り下げる予定です。

翻って、中部地方以西では、山の神への神・祭事、行事はいかなる月日に実施されているのでしょうか。前記、柳田らの近畿地方及び中部地方の森林組合を対象にした調査では、奈良県、和歌山県、三重県、三遠・東濃地域では7日、兵庫県、京都府、滋賀県、北陸地域では9日、甲信・静東地域では17日に実施している組合が多いと報告されています。新潟県のみ中越から下越にかけて12日が多いようです。「十二」に重きを置く東北日本と「七」、「十七」など「七」が主体の中日本で、聖なる数字に差異があるのは非常に興味深い点です。東北日本と西日本の山の神信仰は別の文化的系譜に属する、つまり、東北日本の山の神信仰は、北方から伝播した要素が包含されているとの示唆もあります（赤坂憲雄編集，2004）。アイヌ語地名研究家の山田秀三は、アイヌ語らしい地名は、「東は仙台平野から、西は秋田・山形県境辺へ結ぶ線がアイヌ語地名の濃い地帯の南限線」と考察しています（山田秀三，1993）。実際に本県には、鬼首に保呂内（アイヌ語で「大きい沢（ホロ＝大きい、ナイ＝沢・川）」）などアイヌ語らしい地名が散見されます（北海道三笠市には「幌内」の地名がある）。つまり、そこにはアイヌ語を話す人々が暮らしていたということになります。また、ドイツ人の民俗学者ネリー・ナウマンは、「日本各地の山の神信仰は、本来唯一の共通根源から派生しているものではなく、この信仰の中には様々な異質の要素が包含されていて、それらが長い年月の間に多様な結合体を形成したものと考えられる」と述べています（ネリー・ナウマン，1994）。東北地方のマダギが信仰する狩猟における古層の山の神が、里の民が信仰する田の神・山の神と同じ系譜として連続的に捉えうるのか、それとも東北日本の古層の山の神は西日本とは別系統なのか、それはつまり“日本列島全体”の縄文文化・弥生文化の連続性に関わる問題にも繋がります。殊更に知的探究心を刺激されるテーマと言えます。

次号以降も、アンケート調査の結果を順次紹介していきます。

※¹ 山上の磐座（いわくら）にある山宮に対して、遙拝所として山の口にあるのが里宮。前号で紹介した柳田國男の山の神・田の神循環去来説の骨格をなす概念。

※² 山の神である「オオヤマツミ」は、古事記では「大山津見神」、日本書紀では「大山祇神」と表記される。

【引用・参考文献】

- 菊地章太：十二山ノ神の信仰と祖靈感（上） 東洋大学福祉社会開発研究創刊号 149-156 2008
 十二平集落記録誌編集委員会編：ここはじょんでえら（震災を経験した小千谷市十二平集落の道標） 十二平を守る会 2010
 小千谷市企画政策課：新潟県中越地震から10年 震災を乗り越え新しいまち・小千谷への挑戦—小千谷市復興計画の長期検証（総括）— 新潟県小千谷市 2014
 赤坂憲雄責任編集：東北学 Vol.10 東北芸術工科大学東北文化研究センター 2004
 高橋喜平：みちのくの山の神 岩手日報社 1991
 柳田邦玲雄・松本武・岩岡正博：中部地方の森林組合における山の神の信仰形態の特徴と地域性 中部森林研究 No.64 73-76 2016
 ネリー・ナウマン著，野村真一・檜枝陽一郎訳：山の神 言叢社 1994
 山田秀三：東北・アイヌ語地名の研究 草風館 1993



普及指導の現場から

普及指導業務に従事している各事務所職員の活躍の様子を紹介します。

◎活力ある林業県宮城と美しい森林づくりを目指して ～みやぎ森林・林業未来創造カレッジの研修から～

○はじめに

センターでは、令和3年度からみやぎ森林・林業未来創造カレッジにおいて、森林・林業に関する多様な人材の確保・育成に向けた研修講座を運営しています。今回は、現在実施中の広葉樹ビジネス講座の実施内容についてご紹介いたします。

○広葉樹ビジネス講座について

広葉樹ビジネス講座では、県内の広葉樹資源の活用に向け、多様な視点からのビジネス化を検討するため、広葉樹林施業の基本知識の習得から、木材として広葉樹を活用する為の知識や、県内・県外の広葉樹加工の現場視察、スツール等の製作体験による木工技術の習得、木育ワークショップの運営のほか、受講生が連携したビジネスプランの検討までの幅広い内容について、年間10日間、2ヵ年間で修了するカリキュラムとなっています。



写真1 広葉樹林の林分調査

○具体的な講座内容

東北大名誉教授等による広葉樹林施業についての講義や、センター内の広葉樹林をモデル林として設定するための林分調査、植生調査等を通じ、広葉樹資源の基本的な知識を習得します。（写真1）

加工技術では、広葉樹製材から家具製作までの一連の工程について、見内外事業体の協力の下、大切なポイントについての指導を含む視察研修や（写真2、3）、材料加工体験、ツール製作を通じた木工技術の基本技術習得（写真4）、木育ワークショップの実施、グランピング等における端材活用など、多様な視点から広葉樹林や広葉樹材の活用を自主的に学ぶことが可能な研修内容となっています。



写真2 視察研修

◎ビジネス化に向けて

広葉樹のビジネス化は、木材のとして販売、製材品や、各具木工製品としての販売、ワークショップや広葉樹の成分活用、広葉樹林として空間活用等、間口が広く、かつ奥行きもある取組となります。講座がビジネス化の一步となれるよう、今後とも講義内容の充実を図っていきます。



写真3 視察研修



写真4 木工技術の基本技術習得

【普及指導チーム 伊藤 彦紀】

🌸🌼 楽/学広場

センター主催の各種イベントや研修会の開催結果、今後の開催予定などをご紹介します。

◎種苗・育苗業務の現場便り

今回は、少花粉スギ挿し木苗の生産作業と少花粉スギ種子生産に係る着花促進作業について紹介します。

はじめは、場内の少花粉スギ採穂園での挿し穂の採取とミストハウスの挿し床への挿し付け作業です。作業は2～4月に行います。

- ① 幹から伸びる木化した枝先（拠点）から伸びた若枝を採取します。
- ② 挿し穂は、穂先から22cm（剪定挟みの長さ20cmが目安）に切り揃えます。
- ③ 穂先側の3～4枚の葉を残し、それ以外の葉は切り取ります。



なお、現在、5品種が少花粉スギに登録されています。少花粉スギの花粉飛散量は普通のスギの1%以下です。次に、採取した挿し穂をミストハウスの挿し床に挿し付けます。

④ 採取後一晩水ざしし吸水させた後、挿し穂を切り戻します。

⑤ 切り戻した部分を発根促進剤に3秒間浸します。

⑥ 発根促進剤は、「オキシベロン」です。2倍に希釈しています。



⑦ ミストハウスの挿し床には真珠岩パーライトを敷詰め、器具で等間隔に深さ6～7cmの挿し付け穴を付けます。更に、深さ8～12cmには10cm間隔で温床線（電熱線）を張り巡らせています。

⑧ 発根促進剤に浸けた後速やかに、付けた穴に挿し穂を挿し付け（軽く挿入）ます。

⑨ 挿し付けてから8月までミストハウスで養苗します。毎日、8～17時の1時間毎に約1分間、散水します。散水は、電磁弁で自動に行われます。



このように、ミストハウスでは、多孔構造である真珠岩パーライトの高い保水と温床線による保温（挿し床内を23℃程度に保温）により挿し穂の発根を促しており、最近4カ年は平均82%の高い発根率となっています。

次に、発根した挿し木苗の馴らし床への床替え作業です。9月に行います。

⑩ 移植する際に、根の付き方を確認します。横から出ている根は切除します。

⑪ 器具を使って、挿し木苗を等間隔に植え込みます。

⑫ 屋外の馴らし床で翌年の3月まで、一冬越して養苗します。なお、土に山砂と真珠岩パーライトを混ぜており、排水を良くしています。



続いて、少花粉スギ種子生産に係る着花促進作業について紹介します。

⑬ 雄花の着花を促進するため、少花粉スギ採穂園のスギにジベレリン（50倍希釈）を散布します。6月下旬に行います。

⑭ 雌花の着花を促進するため、少花粉スギミニチュア採種園のスギにジベレリン（50倍希釈）を散布します。7月下旬に行います。

このように、少花粉スギの人工受粉には少花粉スギ採穂園の混合花粉を使います。少花粉スギミニチュア採穂園のスギにも、わずかながら雄花が着花するため、自家受粉を防ぐため、人工受粉用の袋掛けを行う前に、全て取り払います。

⑮ 今年3月の写真です。人工受粉用の袋を除去した時の様子です。人工受粉により球果が実っています。



なお、今回紹介しました作業の様子は、宮城県林業技術総合センターのYouTube※で、ご覧いただくことができます。※<https://www.youtube.com/channel/UCw7NuQYCd-a5Cx9l3I5SkIA>

次回は、今年3月に人工受粉した球果の採取から種子の精選及び発芽試験などについてレポートします。

【企画管理部 千葉 利幸】

◎学都「仙台・宮城」サイエンス・ディ2022

7月17日(日)、東北大学川内北キャンパスの講義棟において、NPO法人 natural science 主催の『学都「仙台・宮城」サイエンス・ディ2022』が開催され、林業技術総合センターも参加・出展しました。このイベントは、科学や技術の“プロセス”を五感で感じられる場づくりを通じて、共感の喜びや知的好奇心がもたらす心豊かな社会の創造を目指して開催されています。3年ぶりのリアル開催となった今年も企業や大学・高等学校など多くの参加団体が講座及び体験型プログラムを出展し、家族連れなど定員いっぱいとなる多くの方が来場されました。

当センターでは、「林業技術総合センターの仕事のをぞいてみよう」と題し、①当センター業務及び研究内容の動画紹介、②少花粉スギ苗、マツノマダラカミキリ標本、ハタケシメジ菌株、ポスターの展示と研究員による解説、③林業従事者のコスチューム体験、④木育やみやぎ森林・林業未来創造カレッジの紹介などを行いました。

終日多くの方で大変盛り上がり、地球規模の環境問題が注目されている中、林業への関心の高まりを改めて実感しました。今後もイベント等の機会を捕まえ、林業の魅力を発信していきたいと思っています。



【企画管理部 千葉 利幸】

◎本県にツヤハダゴマダラカミキリが侵入しました

令和3年に本県ではじめて外来種であるツヤハダゴマダラカミキリの生息が確認されました。ツヤハダゴマダラカミキリは中国や朝鮮半島の原産で、在来種のゴマダラカミキリの近縁種です。多くの国で生息が確認されており、日本では令和4年8月現在で本県を含め8県で確認されています。与える被害は甚大で多くの広葉樹を枯死させるため、国際自然保護連合により「世界の侵略的外来種ワースト100」に選ばれています。

在来種のゴマダラカミキリは柑橘類の重要害虫として知られており、イチジク等にも被害を及ぼしますが、農薬による防除技術の向上により激甚な被害までは至りません。一方、ツヤハダゴマダラ



カミキリは、他国で激甚な被害を及ぼしている上、今後、日本でどのような被害を及ぼすかわからず防除技術も確立されていないため、侵入初期である今のうちに被害木の伐採等により確実な駆除を目指す必要があります。

両者の外観はよく似ていますが、ツヤハダゴマダラカミキリはゴマダラカミキリにある胸部の白い斑紋と上翅基部の顆粒状突起がありません。詳しい外観の違い等については林野庁が作成したチラシをご確認ください。

◎林野庁作成チラシ（ツヤハダゴマダラカミキリの生息が確認されました）

https://www.rinya.maff.go.jp/j/hogo/higai/attach/pdf/sonota_R3-2.pdf

かつて子供たちを熱狂させたウルトラマンの最終回到登場した怪獣ゼットンが、ウルトラマンを倒したことで、ウルトラマンは無敵だと信じていた子供たちの夢を打ち砕きました。しかし、ウルトラマンに代わって人間がゼットンを倒したことで、子供たちに人間の無限の可能性を感じさせました。ゼットンの背中の中はゴマダラカミキリをモチーフにデザインされたと言われています。ゴマダラカミキリの被害を抑えることができた我々が、ツヤハダゴマダラカミキリという新たなゼットンを倒せるかは、侵入初期である今の対応にかかっているのかもしれない。

【環境資源部 田中 一登】

庶務のまなざし

私が、宮城県職員として入庁し、半年が過ぎようとしています。なにも分からず、不安と緊張で慌てていた4月に比べると少しは落ち着いてきたかなと思います。

林業技術総合センターは緑豊かな環境に囲まれています。緑に囲まれていることもあってか、毎日、穏やかに業務をこなすことができます。これからの季節は、センター内の木々が緑から紅色や黄色になり紅葉を楽しむことができるそうです。冬になれば雪が降り、また違った景色を楽しむことができます。春になればサクラも咲き、1年を通してセンターの季節を楽しむことができます。1年の季節の流れを間近で感じながら業務に取り組めることは、今後の県職員生活のなかでもなかなか経験できないことだと思うので、大事にしていきたいなと思います。

【庶務 松村 和樹】

編集後記

事務・研究棟及び研修棟が2021年9月に竣工し同年12月に供用開始しましたが、それまで使用していた本館及び研修館は現在どうなっているのかといいますと、本館は、旧本館として2階を研修施設で使用しています。研修室は3部屋ありますので、使用したい場合は企画管理部までご連絡ください。また、研修館は解体し更地となり、現在は職員駐車場として使用しています。

折しも、メッサみやぎは今回の発刊で第60号となりました。休刊もありましたが、26年に渡る発刊はこれまでの担当者の熱意やセンターの団結力によるところが大きいです。

第60号発刊という節目を迎え、先人達の軌跡を絶やすことなく、これからもセンターの成果を広く伝えていく情報誌としての役割を果たしていきたいと思います。

最後までご愛読いただきありがとうございます。

【担当 M.M】

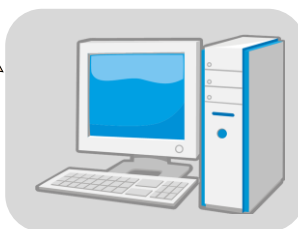
宮城県林業技術総合センター

〒981-3602

黒川郡大衡村大衡字はぬ木 14-1

TEL022-341-3262 FAX022-345-5377

<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/stsc/met-sa.html>



メッサ(METSÄ)とは……

森をこよなく愛するフィンランド人の言葉で「森、木」を意味します。